斎藤環 評

知性は死なない ――平成の鬱をこえて

與那覇潤著(文藝春秋・1620円)

新進気鋭の歴史学者として〝デビュー〟した著者は、2011年に出版した『中国化する日本 日中「文明の衝突」一千年史』(文藝春秋)も大きな話題を呼び、その活動の場を一気に拡げつつあった。評者も対談でお世話になったことがあるが、学者としての誠実な佇まいからは想像できない思考のスケールに驚かされた記憶がある。

しかしその後、気がつけばその名前を目にする機会がめっきり減っていた。本書を読んで驚いた。著者は14年に躁うつ病を発症して入院治療を受け、17年には大学の仕事を辞していたのである。

本書は、著者が罹患した躁うつ病の体験に、19年4月に終焉を迎える平成時代の社会的な変動を二重写しにするという、いささか奇妙な構成を取っている。精神科医としてまず興味深いのは、前半部分に記された著者自身の自己分析である。発症に至るまでの詳しい経緯と、うつについての俗説を正す「10の誤解」の部分、さらには精神病理学を援用した自己分析に至るまで、知識人の書いた当事者本としてもきわめてユニークな内容になっている。

精神病理学とは、簡単に言えば「精神疾患の心理学」であり、精神医学の中では近年凋落が著しい分野だ。

身体性に裏打ちされた言語が重要

しかし本書にあっては、このパートはきわめて重要である。著者は精神医学の教科書などにはよらず、精神病理学の方法論を用いて自己分析を行っている。当事者が自分自身の言葉で自分の病気を解明する行為を当事者研究というが、精神病理学がそうしたツールになるというのは新鮮な驚きだった。

この方法論を用いた著者の結論はこうである。人間のあり方を言語と身体のふたつの極からとらえるなら、躁状態とは言語のほうにバランスがかたよった状態であり、うつ状態とは物質としての身体のほうに振れきってしまった状態ではないか。自分の言葉に引きずられるようにして過活動になり、そこで前借りしたエネルギーを身体でかえすうつ状態に陥ると、活動がまったくできなくなる。おそらく精神科医からは異論が出そうなこの解釈も、著者自身の罹病体験に裏打ちされた言葉と考えるなら強い説得力を帯びてくる。

著者は大学に勤務していた当時、さまざまに理不尽な出来事を経験して、大きなストレスを感じていた。しかし、自身の疾患はそのせいである、とはしない。著者が憂えているのは勤務先の理不尽といった些末な問題ではなく、平成年間における知性の凋落ぶりのほうである。

著者によれば、いま世界規模で「身体が言語(理性)に反発している」のだという。ひところ吹き荒れた(誤用を含む)反知性主義批判にしても、身体性に配慮を欠いたために人々の支持が得られなかった。こうした身体の反乱が世界規模で起きた現象が「帝国の崩壊」である。

著者は帝国を「言語」によって駆動される理性にもとづき、官僚機構が制度化されたルールをもうけて統治している空間」と定義づける。その一方で民族を「ここからここまでが『われわれ』の範囲だ」という、身体的な実感にもとづく無媒集団のことをいう。

こうした視点から世界情勢を眺めると、ソビエト連邦の崩壊も、トランプ大統領の「アメリカ・ファースト」も、「帝国」(言語)に対する「民族」(身体)の異議申し立てと考えられる。イギリスの離脱に端を発したEU(帝国)の解体危機や、沖縄の基地問題にもそうした側面があると著者は指摘する。そんな中で、なぜひとり中国のみが安定した「帝国」を維持しているのか。著者は内藤湖南の言葉を引いて、人々(身体)が超長期に及んだ帝国の支配に慣れきってしまったから、と解釈する。

それでは、どのような社会が望ましいと考えるべきか。著者は自らの病の体験にもとづき、共産主義と訳されてきた「コミュニズム」を、社会が能力を共有する「共存主義」と訳し直すことを提案する。あらゆる能力は「私有」することができない。それを私有可能とする個人単位の成果主義は、組織を流動化・不安定化させてしまう。共存主義とは能力を組織が共有することで、組織の安定と競争原理を両立させることであり、この点で多くの日本企業はコミュニズム的である。これからの社会では、企業の外にコミュニズムを解き放ち、能力の共有と自由や競争が共存できる「赤い新自由主義」が対抗軸になる、と著者は主張する。

しめくくりに著者は読者に呼びかける。「なぜ」という疑問を駆動させる身体的な違和感と言語による思索、その双方を大事にしてください、と。評者の臨床経験から補足するなら、実は言語と身体は対立しない。たとえば対話における言語は、身体性抜きでは十分に機能し得ない。

望ましい知性とは、身体性に裏打ちされた言語で構成されたものであり、その意味で知性ある人の対話による団結を呼びかける著者の姿勢には強い共感を覚える。一度は絶望の淵をさまよいながら、新しい言葉を携えてここに〝生還〟した著者の姿こそが「知性は死なない」ことへの意志と希望をみごとに体現している。

みすず 9月号

(みすず書房・324円)

酒井啓子「どけ、この文明は入れないぞ」が印象的。スペインのセビーリャで開かれた世界中東学会大会。推進役はキリスト教、ユダヤ教、イスラム教の文化共存を謳う「三つの文化基金」。精神は良いが現実は甘くない。

たとえばキリスト教の大聖堂に変えられたコルドバのモスク。教会が管理するいま「モスク仕様のまま残されている回廊では、地べたに座ることが禁止されている」。イスラム教徒の祈りのための行為だからだ。イスラム教徒がいうには、スペインでは食事の禁忌を守るのが難しい、豚肉が入っていない料理がないに等しいから、と。続く国境の物質的な壁の話も強烈だが、文明がまず身体の問題、感覚の問題としてあることの指摘が貴重に思える。(士)

MAGAZINE

エルサレムの悲哀 木犀社・2700円

著者 村田靖子さん

小説通し聖地の多様性描く

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という三大一神教の聖地であるエルサレム。大学卒業後の1968〜69年、キブツのボランティアとしてイスラエルで過ごし、初めて訪れた。「こんなに複雑で、錯綜した都市ってほかにはない。ワッと心をつかまれてしまいました」

現代ヘブライ文学の研究者、翻訳家として、毎年のように訪れ、国の変貌を長年にわたって見つめ続けてきた。「エルサレムの多様性がテーマ」という本書では、九つの短編を通してモザイク都市に息づく人々を、万華鏡のように映し出す。

ホロコーストの犠牲者、難民キャンプに育ったパレスチナ人女性、少数派のキリスト教徒、軍事衝突で息子を亡くしたイスラエル人の母親、兵役を拒否した若者――。「ほとんどの登場人物にはモデルがいますが、かなり創作しました」

ノンフィクションではなく、小説にしたのは、「歴史の本はいっぱい出ているけど、そこに生きている人間が複雑なものを背負い、いかに悲しんだり喜んだりしているかというのは、フィクションでなければ書けない」との思いからという。

その一方で、日本人がこれを書いてもいいのかという葛藤を常に引きずっていた。それでも、「そこで出会った人々への共感を私が書かなかったら、イスラエルにコミットしてきた最後の仕上げができないと思いました」。

日本人にとっては地理的にも遠く、なじみの薄い国だが、実在の地名や建物、通りの名前が、物語に鮮やかなリアリティーを与える。「ジェームズ・ジョイスの『ダブリン市民』みたいなのが書きたかった。緻密に都市というものを浮かび上がらせたかった」と語る。

先だって、イスラエルで「ユダヤ人国家法」が制定されたことを憂慮する。公用語からアラビア語をはずすなど、ユダヤ人優位を規定する。「どういう国になっていくのか」。そんな思いは締めくくりの「メア・クルパ」にも表れる。

「行くたびに、良くも悪くもこんなに変わるのかって思う。こういう世界があるということを、この本を通して知っていただければ」

文・潘田元子 写真・竹内紀臣

アフター・ヨーロッパ

イワン・クラステフ著、庄司克宏監訳(岩波書店・2052円)

副題は「ポピュリズムという妖怪にどう向きあうか」。欧州各国でみられる極右ポピュリスト政党の台頭について、ブルガリア出身の政治学者である著者が豊富な知識を引き、分析する。

本書は2015年の難民危機が、欧州にとって9・11同時多発テロのようなインパクトがあったと指摘する。これを機に、各国で多数派を形成する市民は「自身の民族、宗教、文化が脅かされる」という恐怖を抱くようになった。一方で、EUの各機関に集まるエリートに対しては、サッカーの強豪チームが巨費を投じて獲得するスター選手のように「フランと同郷ではないし、共通の友人もいなければ、共有する思い出もない」と不信を募らせるという。そうしたことが、国家や宗教への忠誠心を示すポピュリストの伸長に結びついた。

1965年生まれの著者は、20代前半で共産圏の崩壊を経験した。「永遠と思い込んでいた」ものが崩れ去り「あらゆる政治的なものは、はかないという感覚」を抱いたという。では、西側諸国が築いてきたリベラル・デモクラシー体制も永遠ではないのか。日本に住む読者にとっても、示唆に富む論考である。(隆)

医師が診た核の傷 現場から告発する原爆と原発

広石近広著(藤原書店・2376円)

タイトルが示すように「核の傷」を診た医師たちの報告である。血液や甲状腺の専門医や臨床の内科医らが提示するカルテは、現場からの重い問いかけにほかならない。膨大編と原発編にわけて、広く、深く、鋭く、網羅されている。

抑制された筆致に誘い込まれ読み進めると、思わず目を留めた箇所がある。福島で15歳のときに原発事故に遭遇し、20歳で甲状腺がんの手術を受けた男性患者の病理組織が、チェルノブイリの小児甲状腺がん患者に酷似していたというのだ。たまたま広島で手術した一例とはいえ、東京電力福島第1原発から放出された放射性ヨウ素が原因とみられる甲状腺がんの例証となる可能性もある。

外務省の対応には驚かされた。「放射線が人体に与える影響」について、外務省は委託研究を行ったが、研究者から出された報告書の次の文言を削除したという。〈悠兵器は非人道的なものと言わざるをえず、今後決して二度と使用されないこと、新たに作られないこと、さらに究極的には廃絶されるべきこと、を本研究の結論とする〉

良心の医師たちの真摯な記録であり、人類への警鐘でもある。(元)

昨日読んだ文庫

永井隆

いわゆる「働き方改革」として、注目を集めたのがサラリーマンの副業だが、もう60年以上も前から、堂々と副業にいそしんだ人たちがいた。『詩屋(現在のサントリーホールディングス)宣伝部に在籍し、コピーライターや広報誌『洋酒天国』編集長をしていた開高健と同じく山口瞳だ。

芥川賞受賞を前に多忙を極めた開高が、1957年9月発行の同誌に独断で「編集者募集」と広告を打ち、応じてやってきたのが勤務先の倒産で失業していた山口だった。山口もその後、直木賞を受賞する。2人の大作家はいずれも退社せず、兼業を継続した。しかも、2人は〝勤め人〟としても名コピーを世に送り出し続けたのだ。『やってみなはれ みとくんなはれ』(新潮文庫)は、社史『やってみなはれ サントリーの70年』(68年6月刊)に収録されたのが初出。つまり、社史の一部として書かれたものである。創業者・鳥井信治郎の小説を山口が、戦後の高度成長期までの会社の歩みを開高が、それぞれ執筆した。

熊志家として知られた創業者だが、2人の作家は「信治郎のわるいところはどこか。いちばん駄目な面は何か」と関係者を取材して歩く。古老の社員は素直に答え、そのまま掲載されている。プライベートを含め、大阪・船場が生んだ発代の経営者を裸にしていて、美談だけで彩られた社史とは一線を画す。

「やってみなはれ。やらなわからしまへんで」。信治郎の口癖は、いまも同社のDNAだ。1899年の創業以来、戦前は信治郎によるウイスキー参入、戦後は二代目社長だった佐治敬三によるビール参入と、安穏を選ばずに危ない方の橋を渡ってきた。真正では、四代目の佐治信忠が米ビーム社を巨費で買収し、世界に打って出ている。「失敗よりも、何もやらないことがサントリーでは罪になる」(同社幹部)企業文化だ。

だが、どんな組織も開高によれば「功業成ると、巨獣化して(中略)内部で老朽と解体が始まる」。防ぐためには、挑戦を続けることだが、その原動力になるのは一流の副業をもつような〝奇人・変人〟ではないか。(ジャーナリスト)

今週の執筆者

「この3冊」の三谷宏治さんの書評は『戦略子育て』(東洋経済新報社)。角田光代さんは作家▽鹿島茂さんは明治大教授(仏文学)▽渡辺保さんは演劇評論家▽中村桂子さんはJT生命誌研究館館長▽斎藤環さんは筑波大教授(精神科医)▽「昨日読んだ文庫」の絵は舟橋全二さん。

ガイドブックに載っていない観光地
中国の〝穴場〟めぐり
中国滞在経験豊富な駐在員などが「穴場スポット」全30カ所を写真と地図、コラムを交えて紹介!
A5判フルカラー 日本日中関係学会 編 1500円

特別公開 18年
関口知宏が語る 日本との違いをかき集める旅
「異なった国を旅してみて、初めて日本を知ることができる」
NHK「中国鉄道大紀行」三万六千kmの旅で見つけた日本との「違い」を語るインタビューを掲載!
宮本雄二 元中国大使・日中関係学会会長 推薦
関口知宏 著 「ことづくりの国」日本へ
そのための「喜怒哀楽」世界地図
中国の喜 インドの哀 韓国の怒 日本の楽
調査などで話題!
大ヒットにつき増刷決定!!
1600円

若者が考える「日中の未来」懸賞論文集
宮本雄二 監修
シリーズ
① 日中間の多面的な相互理解を求めて 2500円
② 日中経済交流の次世代構想 2800円
③ 日中外交関係の改善における環境協力の役割 3000円
④ 日中経済とシェアリングエコノミー 3000円

日本橋報社 9月出版案内
おかげさまで22周年
http://jp.duan.jp/ 〒171-0021 豊島区西池袋3-17-15 Tel 03-5956-2808 Fax 5956-2809 E-mail info@duan.jp
ご注文は全国の書店またはアマゾン等をご利用いただけます。トーハン・日販その他 取次コード:5752 ※表示価格はすべて税別

中文和訳の好例! 日中翻訳学院 講師の訳書
武吉次朗 訳 新中国に貢献した日本人たち 2800円
続 新中国に貢献した日本人たち 2900円
新版 中国の歴史教科書問題 3800円
町田晶 訳 悩まない心をつくる人生講義 1900円
東滋子 訳 中国の未来 1800円
共著 明石康 元国連事務次長 趙啓正 元国務院新聞弁公室主任
小さなぼくの日記 豊子愷児童文学全集 第2巻 海老名香葉子 推薦 1500円

日中中日 実戦編IV 翻訳必携 こなれた訳文に仕上げるコツ
武吉次朗 編著 1900円
解説編・例文編・体験談の各項目に「武吉塾」の授業内容を凝縮!
①翻訳必携 翻訳の達人が軽妙に明かすノウハウ
②翻訳必携 実戦編 よりよい訳文のテクニック
③翻訳必携 実戦編II 脱・翻訳調を目指す訳文のコツ
各1800円
④翻訳必携 実戦編III 美しい中国語の手紙の書き方・訳し方 ロサンゼルス総領事「日中体験的相互理解」著者 千葉明 著 1900円
病院で困らないための 日中英対訳 医学実用辞典 松本洋子 編著 2500円
16年続いたロングセラーの最新版 青山英康・南裕子 推薦

おかげさまで10周年 出版翻訳専門 日中翻訳学院
人気の「武吉塾」第21期 受講生募集中
講師 武吉次朗、町田晶、東滋子
http://fanyi.duan.jp/
「武吉塾」第20期 公開セミナー 武吉先生最終講義
9月22日(土) 14時〜 西池袋
詳細は http://duan.jp/922.htm

毛沢東生誕125周年記念 おすすめ書籍
中国政治経済史論 毛沢東時代 橋爪大三郎氏絶賛!! 「毎日新聞」1/14書評
胡鞍鋼 著 日中翻訳学院 訳 15000円
「待望の中国の自己認識の書だ。日本語訳文も正確で読みやすい。中国関連の必須図書として全国の図書館に一冊ずつ備えてもらいたい」(橋爪氏)
第6回 華人学術賞 受賞
早期毛沢東の教育思想と実践 中国社会科学院 鄭萍 著 宮原修 元お茶の水女子大学大学院教授 推薦 7800円
幼少期からの足跡をたどり、毛沢東思想のルーツを探る
村山富市 元首相 推薦
湖南省と日本の交流素描 中国を変えた湖南人の底力 日中対訳 石川好 著 日本湖南人会 訳 1900円
今から100年以上も前、毛沢東出生の地・湖南省と日本との間にあった深い繋がりを探る
◆中国の「西郷隆盛」黄興先生
◆宮崎滔天に宛てた毛沢東からの手紙
◆芥川龍之介と湖南 など
毛沢東の故郷からの新しい風 書名揮毫 村山富市 元首相
湖南商人 湖南の実業家、経済人という知られざる分野の先人たちに光を当て、清以来の輝かしい「湖南商人」の実績を紹介。
日中対訳 伍麟昭・徐志勇 著 多田敏宏 訳 浅羽中 監修 1800円